

第2回 アドバイザリー会議

○井上課長 それでは、皆さんおそろいでございます。ほぼ定刻でございますので、第2回目となりますアドバイザー会議を開催させていただきたいと存じます。よろしくお願いいたします。

本日の進行を務めます教育総務課長、井上と申します。よろしくお願いいたします。

今回の会議につきましては、議事概要作成のため録画させていただきますので、御承知おきをお願いいたします。

まず初めに、オンラインで御参加いただきます学識経験者の先生ということで御紹介させていただきます。

日本大学文理学部、末富教授でございます。よろしくお願いいたします。

○末富先生 よろしくお願いいたします。すみません。さっきお断りしておいたんですけども、今日は子どもの具合があまりよくないので、ビデオをオンにする時間はちょっと限られていると思いますが、よろしくお願いいたします。

○井上課長 よろしくお願いいたします。

続きまして、兵庫県立大学環境人間学部、竹内准教授でございます。よろしくお願いいたします。

○竹内先生 よろしくお願ひします。

○井上課長 （仮称）世田谷区教育振興基本計画につきましては、両先生の御意見などを踏まえながら、令和4年度中に教育目標と基本方針の骨子部分までを検討しまして、策定してまいりたいと考えてございます。

本日の会議の流れでございますけれども、まず第1回アドバイザー会議の振り返りを行った後に、（仮称）世田谷区教育振興基本計画の構成（案）や子どもの意見聴取方法などにつきまして意見交換を実施してまいりたいと考えてございます。出席者の皆様、積極的な御発言、意見交換をお願いいたします。なお、こちらの会議室で発言される区の幹部職員の方につきましては、発言の際は挙手してから発言ということでお願いいたします。

では、まず最初に渡部教育長より御挨拶を申し上げます。よろしくお願いいたします。

○渡部教育長 末富先生、竹内先生、本日はお忙しい中御出席いただきまして、ありがとうございます。

第1回目の意見交換会、どうもありがとうございました。それを基に世田谷区教育振興基本計画の骨子部分の策定を進めてまいりたいと考えています。末富先生、どうぞ御無理のないようお願いいたします。今日はどうぞよろしくお願いいたします。

○井上課長 ありがとうございます。

それでは、意見交換を始めます前に、本日出席しております区の管理職の職員が自己紹介で御挨拶さしあげます。

○知久部長 教育総務部の部長をしております知久と申します。後ほど議題のほうに入りましたらファシリテートをさせていただきます。よろしくお願いいたします。

○小泉部長 教育政策部長の小泉でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

○平沢参事 教育総合センター担当参事の平沢です。よろしくお願いいたします。

○前島課長 学校職員課長の前島でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

○毛利課長 教育指導課長の毛利です。よろしくお願いいたします。

○滝上課長 教育研究・研修課長の滝上です。よろしくお願いいたします。

○本田課長 今回が初めてになりますが、乳幼児教育保育支援課長の本田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

○井上課長 では、早速でございますが、意見交換を始めさせていただきます。

最初のテーマでございますけれども、第1回アドバイザー会議の振り返りについて、私から説明させていただきます。資料を共有させていただきます。資料を御覧ください。第1回アドバイザー会議の振り返りでございます。

まず、会議概要といたしまして、末富先生の御発言を5点にまとめさせていただいております。1点目としまして、こども基本法を踏まえ、子どもの権利をしっかり位置づけた新たな計画の立案。2点目としまして、学校における子どもへの人権侵害の根絶、指導モデルから支援モデルへの変革。3点目としまして、不登校の子どもたちへの学びの保障や費用の支援。4点目といたしまして、子どもの意見表明の尊重、参画の保障。最後に5点目としまして、子どもの権利を何よりも教職員が学び、研修し、指導していくことが必要。また、管理職への研修を実施し、管理職の意識改革も必要ということでまとめさせていただきました。

続きまして、竹内先生の御発言を4点にまとめさせていただいております。1点目としまして、GIGAスクール構想で子どもたちがネット環境を使う、その中での新しい時代に対応した指導・支援が必要。2点目として、新しい時代に合わせたルールづくりは、子どもたち自身に考えさせることが重要。3点目としまして、ルールは、子どもたち自身で検証させることが必要。最後に4点目として、海外のいじめ対策では加害者にも寄り添っている。日本では、加害者を指導しても、次のいじめが生まれ、支援もなく、学校の先

生に丸投げしているのが現状ということでまとめさせていただきました。

また、両先生の御発言、御意見を踏まえまして、資料の下のほうになりますけれども、「子どもの意見などを踏まえ、子どもを中心に据えた計画を推進していく」、また、「子どもの最善の利益を守っていくことを前提に、5年間の重点事業などを設定し、各課が施策を推進していく」、この2点を「次期教育振興基本計画に必要なこれからの視点」としまして、計画を策定してまいります。

私の説明は以上でございます。

○知久部長 それでは、ただいまの説明を受けまして、両先生からほかに追加する内容などがございましたら、御発言をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

○竹内先生 いや、私はいいと思います。

○末富先生 私も、前回のポイントについてはおおむね大丈夫だと思います。

○知久部長 ありがとうございます。では、ポイントはこちらでまとめさせていただいた資料で了解ということで、確認をさせていただきました。

出席されている各管理職の方々、確認したい点等はございますか。よろしいですか。

では、次のテーマに移らせていただきます。世田谷区教育振興基本計画の構成（案）について御説明させていただきます。

○井上課長 それでは、井上より引き続き説明させていただきます。資料を共有いたします。資料を御覧ください。（仮称）世田谷区教育振興基本計画の構成（案）についてということで説明させていただきます。

まず、今資料として共有させていただいている部分でございます。教育に関します社会の動きや国の動向などを記載してございまして、教育目標や基本方針を策定する際に必要な視点といたしまして、まず、教育目標には「探究的な学び、個別最適な学びの視点」など6つの視点でございます。また、基本方針には「家庭・地域との学びの連携」「キャリア・未来デザイン教育の推進」など12点の視点を記載してございます。これらを踏まえまして、（仮称）世田谷区教育振興基本計画の骨子を策定してまいります。

それでは、別資料の構成（案）を説明させていただきます。

まず、第1章といたしまして6つの項目から構成し、この第1章につきまして、今年度策定してまいりたいと考えてございます。また、第2章につきましては、実施計画（行動計画）と記載してございますが、第2章をこちらで構成しますけれども、この第2章につきましては令和5年度以降に策定しまして、子どもの意見やパブリックコメントを踏まえ

まして、令和5年度末に計画を策定いたします。

それでは、構成（案）の内容を簡単に御説明させていただきます。

2ページをお願いします。

まず最初に「第2次教育ビジョンを振り返って」としまして、国や都の動き、教育に限らない社会背景、現在や未来に向かう教育に関する動きを記載してまいります。また、第2次世田谷区教育ビジョンをアウトライン的な内容で総括しまして、9つの施策の柱を設けてございますが、この成果の記載も考えてございますけれども、資料に記載のとおり、全ての成果や課題を記載していくべきなのかという点を課題として捉えてございます。

次に、2の「策定にあたっての基本的な考え方」としまして、国の教育振興基本計画の内容を記載しまして、また、策定に当たり必要な視点として、子どもの意見を尊重する視点を記載してまいります。

3ページをお願いします。次に、3の「教育振興基本計画と実施計画の位置付け・構成」、また、4の「計画の進捗状況の把握」といたしまして、こちらは教育基本法第17条第2項に基づく計画であること、また、PDCAサイクルの実施などの必要事項を記載してまいります。

続きまして、4ページをお願いいたします。5の「子どもを中心とした教育の推進にあたって大切にすること」といたしまして、こども基本法の基本理念や子どもの権利条約、子どもの意見の尊重や反映などを記載してまいります。なお、このページにつきましては、前回、第1回アドバイザー会議を踏まえて設定をいたしてございます。

続きまして、5ページに参りまして、6の「教育目標と基本方針（取組みの視点）」でございまして、こちらを記載する予定でございまして。本日のところは、杉並区やまた目黒区など、他区が既に策定した内容を参考に掲載させていただいてございまして、世田谷区としての教育目標、基本方針などを3つから5つ程度策定し、掲載していきたいと考えてございます。

最後になりますけれども、先ほど申し上げましたとおり、第2章につきましては実施計画（行動計画）で構成することから、こちらにつきましては令和5年度以降に策定してまいります。

駆け足でございましたけれども、私からの説明は以上でございます。

○知久部長 ただいま、来年度策定を予定しております世田谷区教育振興基本計画の骨子を粗々に説明させていただきましたが、両先生から御意見を伺いたいと思います。まずは

末富先生から、今御説明をさせていただいたんですが、全般を通し、また個別の項目でも構いませんが、御意見を頂戴できればと思います。

○末富先生 はい。ありがとうございます。

まず、教育に限らない社会背景も記載するという点については重要なんですけども、もう一つは、国の第4期教育振興基本計画の動きは一応踏まえておいたほうがいいかなとは思いますが。そのほかにも、社会背景といったときに、特に世田谷区の現状については、国全体の統計と世田谷区の状況を照らし合わせた分析は当然必要になりますので、その点については丁寧な記載が求められるであろうと思われまます。国の教育振興基本計画もどういうスケジュール感になるかはまだ見えていませんが、きちんと書いていただきたいなと思っております。

それから、P D C Aの話が出ていますが、来年度制定される予定のこども大綱においては、恐らくなのですが、こども基本法に基づきまして、政策の評価も含めて、子ども自身の視点を大事にするということが多分出てくるのではないかと考えられますので、単なる役所目線のP D C Aとか、学校目線のP D C Aでいいのか。どういうアウトカムが、例えば教職員のウェルビーイングだったり子どものウェルビーイングとして起きなければならないのかという、どちらかというロジックモデルだとかを含めて、P D C Aは割と陳腐化している面があるなというふうには、私も使いますけれども、思っているんで、もう何十年もP D C Aを回しているだけで大丈夫ですかというのを改めてこの機会に世田谷区としても、今回はどのような視点を大事にしてO D C Aを入れるのかということも御検討いただきたいかなと。

特に行政評価、事業評価において、ユーザビリティ、とりわけ子ども自身ですとか保護者等との関係のユーザビリティの向上が求められることは必須ですので、私も関わる自治体の事業評価とか行政評価が必ずしもそうはなっていない。割と議会対策もあって、行政目線ではあるんですが、ただ、議会だって子どもや保護者が本当によくなっているのかということをお気になさる議員さんはとても多い世の中なので、そのあたりも少しバージョンアップをしていかれたらどうでしょうかということですね。

そして、「子どもを中心とした教育の推進にあたって大切にすること」という5番のところは、恐らく中核的に非常に重要になるわけですけども、教員自身の現時点での意識だとか行動のレベルを測定した上で、次期の世田谷区の教育振興基本計画でどのような到達点を目指すのかというような、やはりエビデンス、ベストなアプローチがないと、教育

の場合、常に理念主導で計画の期間中の効果が上がったのかどうかというのが分かりにくい。行政も、地方自治も、国もですけれども、決して効果をはかるのに適切な統計は整備していませんので、世田谷区として最低限必要な指標はこれで、世田谷がオリジナルで取らなければならないものはこれなのではないかといったような、先ほどのPDCAとも重なりますけれども。では、子どもや教職員にどういうインパクトとかも出していくのか。それがきちんと検証できるモデルとして構築されなければ、いつも私がよく見る、理念ばかりある教育振興基本計画になるのではないかと。一応数値は入っていますけれども、こんなものをエビデンスとは呼ばんなというようなものにならないかと思っていますということなのです。

あわせて、「教職員・大人・地域・子ども自身の取組み」とありますけれども、この部分は、意気込みも含めて、ぜひ子どもや教職員、現場の声といったものも少し取り入れられたら前向きな部分が出てくるかなとは思っているということなのです。

それから、杉並区教育ビジョンのことを出させていただきましたけれども、杉並区も、早速白石教育長が区の学校運営協議会等でもお話しいただいています、やはりこども基本法も出ておりますが、白石教育長が注目されておられるのが生徒指導提要の改定です。子どもが個人として尊重され、権利の主体であるということ、子どもが尊重されるということ、子どもにも考えさせて参画をしていくというやり方をどんどんやっていきましょうということをおっしゃってくださったので、学校の風向きも一気に変わったなというのが私の実感なんです。そうした変化を世田谷で起こせるようなキーワードというものが明確に入ると非常にいいのではないかなと思います。

実行計画等のところは、先ほど申し上げたとおりで、PDCAを、より子どもや教職員に即したもので、特にウェルビーイングの視点ですとかを大事にしながら、検証モデルとして一定の質的クオリティーで、データを取ればいいというものではなく、そのデータ自体も一定のクオリティーに達しているものをぜひ世田谷は取っていただきたいと思っています。

○知久部長 ありがとうございます。

続いて、竹内先生、いかがでしょうか。

○竹内先生 今、末富先生がおっしゃったとおりやと基本的には思います。ちょっとそれにつけ加えるとしまして、こども家庭庁ができたり、子ども中心の理念というところに焦点が当たった時代に出る世田谷の基本理念なので、チャンスやと思います。そういうのを

しっかりとつけた上で出していくというのは非常に重要なと私も感じています。

ただ、どういう形で子どもにそれを意見聴取するかやね。本当に、今、末富先生おっしゃったように、聞いたふりするのは簡単やけど、本当に子どもからちゃんと、時間をつくって、機会をつくって、きっちりしたものを酌み取るような作業というか、そういうものが問われているのだなと。特に5番を具体的にどうしていくかというのが大事なと感じています。

エビデンスベースとかはもちろんなんですけれども、ハードエビデンス、私、実は教員になって2年目にウィーンに行って、ウィーンの彼らがいわゆる学力テストをやっているところとかをちょっと見ていったんですけれども、彼らはやっぱり、エビデンスベースというんですけど、ハードエビデンスとソフトエビデンスに分けているわけです。ウィーン大学で、私、それを基に講義もしたんですけども、ハードエビデンス、つまり学校が元から持っているような不登校であるとかいじめとか、そういうものとソフトエビデンス、だから、いろんな指標。先ほど末富先生がちょっと最後にええかげんなデータというふうに言われましたけど、ええかげんなデータに力を持たせるためには、そういうハードエビデンスをいかにくっつけていくか、その辺が大事なと思います。

とはいえ、でも、いろんなところの基本計画というのはほとんどの教員が見いひん形の本当に宙に浮いたものになってまうんですけども、そうならないようにするためには、やっぱり子どもたちの実感、先生方の実感、それから、きっちりとした比較ができるようなソフトエビデンスも用意しながら、それによって具体的に、ソフトエビデンス、不登校なりいじめなりがどうリンクして、どう変わっていったか、その辺まで行くことと、あと、子ども自身の実感に伴うような聞き取りがあるとか、子どもの声を反映するというか、その反映の仕方が大事ですかね。

僕、今、ユニセフとずっと長く関わっているんですけども、ユニセフなんか海外に子どもの意見聴取はいいのがないかとか、日本の中でいいのがないかということで、私が今、ユニセフと一緒にこれまで5年ぐらいですか、子どもの意見聴取についてちょっとやってきたノウハウがあって、そのあたりについて考えているんですけども、結局何かというと、子どもらにどういう環境を用意して、どういうデータを用意して考えさせるかということだと、アイスブレイクを含めて、分かってきた。だから、そのあたりを今この時期に、国がこども家庭庁をつくって子ども中心のとちようど言うている。先ほど言うたように、さっき末富さんがおっしゃったように、学校が今、本当にもう根底から変わってき

ているところなので、チャンスやと思うので、それを反映したようなものをつくっていったらいいんじゃないかなと思います。

あとは、ソフトエビデンスとしていいのは、やっぱり国際比較。例えば、ちょっとネットでちらっと見てたんですけども、例えば内閣府が出しているような国際比較のデータと比べるとか、そんな形とハードエビデンスとを組み合わせると、何か面白いものができるような気がしています。だから、通り一遍のものをつくってもいいんじゃないかなというのが、ちょっと今は、末富先生とおっしゃると全く同じで、そんなことを僕も聞いていて思いました。内閣府か何かがよくやりますよね。ちょっと画面共有していいですか。

○知久部長 どうぞ。

○渡部教育長 お願いします。

○竹内先生 例えば、こんなものを内閣府が大分前につくって、「今を生きる若者の意識～国際比較からみえてくるもの～」、平成26年で大分前のものです。本当はもっといいのがあるんですけども、例えば自尊感情が低いとか高いとか、じゃ、世田谷区はどうか。これは本当に例で、これと同じものをやれということではないんですよ。でも、そういうのと比較してどうかというようなものをつくって、それが経年でどう変わっていったかとか、それはどういう意味やと子どもから意見聴取するとか、何かそういう具体的などころぐらいまで行かないと、少し格好悪いものになってしまうんじゃないかなというふうにちょっと思いましたけども、具体的な、これを使えとかというところまで僕は考え切れていないので。今、末富先生がおっしゃっていたことと非常に共感もしましたけども、一方で、じゃ、具体的にどういうソフトエビデンスを用意したらいいのかな、単なるPDCAでは格好悪いしというのが、ちょっと聞いていて思いました。答えはないんですけども、雑感です。

○知久部長 ありがとうございます。

ただいま構成（案）について両先生から御意見をいただきました。今の御意見を踏まえて、いかがでしょうか。聞きたいことですかとか不明な点ですか、御質問があれば挙手をお願いいたします。

○渡部教育長 すみません、質問というわけではないんですが、1回目のアドバイザー会議の後で私たちがまとめたものの中に、やはり子どもの意見を聞いていくということがありました。それを基に子どもを中心に据えた計画を推進していくというふうに世田谷区ではこれからやっていこうと思っています。

先ほど末富先生からお話があった杉並区は、もうビジョンは2022というのを出していて、それを見ると、確かに先ほどお話しいただいたように、子どもを中心にというところで、「みんなのしあわせを創る杉並の教育」というとても分かりやすいものを出しています。「共に尊重し、大切にしたいこと」というのも非常に分かりやすくて、「学び合い、信頼をつくり、共に生きる」「ちがいを認め合い、自分らしく生きる」「誰もが社会の創り手として生きる」という目標にっていて、誰にも分かりやすくなっています。子どもも分かるし大人も分かるし、そして教員にとっても分かりやすいというふうになっています。私たちは、こうやって誰が見ても分かりやすい目標をつくるというのを今目標にしているところです。どうしても行政系でつくと非常に固いものになってしまっていくので、それをこれから考えていきたいと思っているところです。

先ほど、生徒指導提要の話があって、そこでの改定に竹内先生も関わっていらっしゃるということだったので、このことについても少し、どのような視点でどういうふうなということも教えていただきたいなと思います。

○竹内先生 生徒指導提要は、主には子どもとネットというのが前回の改定するときには3ページやったんですけれども、今回は生徒指導の中核はネットになるだろうということで、大幅に増やして13ページにしたのかな。それは私が書いたんですけどね。そこで大事にしたことは、議論の中でみんなで共通して出てきたことは、昔から言われてますよね。生徒指導が出てきたときから、自己指導能力というて、日本が昔からやってきた、教員が上から教えるんじゃなくて、自分で考えて自立した子どもをつくっていこうというところに大きくシフトチェンジを今しています。

例えばネットのことで言うと、学校が決めたルールをたんと守らすではなくて、子どもたち自身に考えさせて、子どもたちが考えたテーマについて大人も一緒に考えていこう、そういうものをしています。ただ、子どもたちはまだまだ、例えば、小学校1年生からG I G A端末を使っているので、1年生は分からないことが多いので、1年生の間は他立が大きい。だんだんグラデーション的に自立に持っていこう。ちょうど中学3年生ぐらいを一応出口に置いて、そこで自立していこう、そういう方向性です。

それプラス、担当の文科省の官僚の子ともいっぱい話をしたんですけども、私、そのルールづくりというか、校則とかそのあたりに関しても深く関わりました。そこで、その担当者の子としゃべってたのは、とにかく大人が決めたルールをたんと守らすというのがいい生徒指導で、学校でトラブルがない、問題行動が起こらないのをいい学校という

ふうになんか今まではしてきて、落ち着いた学校、荒れた学校と二分化された。

校内暴力があるかどうか。これは盗んだバイクで走り出す時代が長くあったので、そこを乗り越えた私たちがここからどうするかというと、私、昨日、北区にも行ったんですけど、落ち着いていますわって北区の先生が言うわけですよ。落ち着いているってどういうことか、よくよく聞くと、校内暴力がないということなんですね。そうではなくて、子どもたちが、自分たちで主体的で対話的な深い学びを体験するための生徒指導というかね。そういうのを子どもたちは、前回、末富さんが強調しはった支援という言葉、生徒支援というかね。その支援、生徒指導というのは、生徒にぶつけ合いをさせないとか、不登校にならせないとか、暴力を起こさせないとか、そういうさせないことなんですけども、こういう行動を自分たちで主体的にさせる方向、それをさせることを支援するというところに生徒指導提要も大きな力を割きました。

ただ、なかなかそこを、やっぱり生徒指導提要なので、生徒支援提要ではなくて、生徒指導という言葉が、日本に独特の言葉なんですね。スクールガイダンスというふうに訳しているんですが、全然違うと思います。だから、外国の人に生徒指導ってどういうことやねんと言われても、全然理解してくれないわけです。そこで私が説明して、最終的にウィーン大学の教授が分かってくれたのが、「生徒指導というのは学校の中のポリスマンだ」と僕は言ったら、「ああ、なるほど、よく分かった」と言うわけです。だから、ポリスマンの代わりを生徒指導がしていたわけです。

そうではなくて、子どもたちが、例えばいじめをしないにはどうしたらいいか。アメリカなんかやと、僕は大学院のときからシチズンシップ教育をずっとやっていまして、スクールコードとか、ピアサポートとか、学校の中で大きなトラブルをした子をどうやって仲裁したらいいかとか、いいかどうかはあるにして掃除をさすとか、そういうのを子どもたち自身が考えて、子どもたちが裁いていくというシステムを持っている学校もありました。

そこから、前回の末富先生がおっしゃった、生徒支援主事というのはその辺のことを言うてはるんだなと僕も合点がいったんですけども、まさに末富先生が前回おっしゃったようなそういう形で生徒指導提要は大改定が起きます。

ただ、本当は8月、今年度の初めに出すはずが、どんどんどんずれ込んでるのは、実はその辺の観点もちよっと、うん？という部分があるのかもしれないね。雑駁に言うと、大体そんな感じです。

○渡部教育長 ありがとうございます。

子どもの意見、生徒の意見を聞くというのは、ただ聞けばいいだけではなくて、かなり難しいと私は思っています。

○竹内先生 そう。難しいです。

○渡部教育長 世田谷区でも、生徒会サミットというのをやっています、それは子どもが、一応自由に意見は言っていることになっているんです。でも、非常に大人が——生徒会の会長が出てきているかもしれないんですけども、とても優等生のような意見を言っています。これは、やはり子どもの意見を聞くということにはならないと思っていて、そこをどういうふうに改善しようかなと思っているところです。

○竹内先生 まさにそこが勝負で、子どもに大きな聞き方を迫ると、教師の顔色、大人の顔色を見て、「どんな学校をつくりたい?」「幸せな学校をつくりたい」とか、子どもは言うんですね。だから、もっと具体的に、子どもが本当に主体的に考えるような質問をして、そこでやっぱりぶつけていかないといけないでしょうね。

前回ちらっと聞きましたけれども、前回のヒアリングのテーマが何でしたっけ、教育長。前回聞いたテーマの、1回目のときに子どもたちにした質問は何でしたっけ。

○渡部教育長 生徒会サミットでしたっけ。

○小泉部長 一番最初にアンケートをやっている……。

○渡部教育長 こっちのアンケートのことですよ。「みんなが楽しいと思う学校はどんな学校ですか」。

○竹内先生 うん、うん。言うたらね、その質問を聞いたら、笑顔あふれるとか、行事があるとか、もう答えが大体決まるわけですよ。だから、どうやったら子どもらが本当に主体的になるかどうかというのは、それこそ、そこが大人が物すごく議論しないといけないところで、そこは本当に大人次第でしょうね。いろんなところでいろんな議論をさすときでも、どういう発問をするか、何について議論さすか、これが一番肝のところで、それをまず大人がこれから考えていくというのが大きなテーマになっていくでしょうね。そこが一番難しいですよ。

だから、子どもに「どうや?」って聞いて、「こうや」で、そのまま「ああ、そうそう。ありがとう」、子どもが言うてるからって、でも、そのままできへんでしょう。例えば子どもが授業中にパソコンを使ってゲームをさせてくれと全員が、生徒会が言うたとする。それをそのまま聞かれへんしね。全員丸坊主にしたいといっても全員丸坊主にもでき

へんしね。

だから、その論点整理が必要なわけです。子どもがどこに息苦しさを持っていて、どこに楽しさを持っていて、それが今の学校とどう違っているか、その論点整理がないまま進むと、本当に言うてるような、子どもたちが空中分解するような議論になるわけですよ。

教育長が何を見ておっしゃったか、僕もその場におらんから分からへんけども、大人が求めているようなことをたらたら言うというのは、それは質問に対して何をしゃべったらいいかというのを子どもたちが主体的に判断できてないから、ああ、これぐらい言うてたら無難やろなというふうに、こいつら、これぐらいの回答でええやろな、ちょろい、ちょろいと思いながら言うてるやつもおったかもしれません。分かりませんよ。ごめんなさいね。そこはその現場を見てへんけど、大阪の子やったら、ああ、こいつはちょろっていうふうに、僕は笑われていると思う。僕はね。世田谷区やから、そんなあほなことはせえへんと思うけども。

だから、そのあたりの議論のさせ方というところが、今後まさに目指す方向性について子どもから、子どもの状態、子どもの思いをしっかりと受けた上で、彼らと一緒に議論していく。子どもが言うてることと大人が乖離していたら、そのうちで、ここは大人は譲歩できるけど、これはどうやと真剣にこっちも子どもの意見に向き合うような態度が要るでしょうね。

子どもらは、具体的に言うたその言葉で何かが変わったら、次回来たとき、今度も言うたろうやけど、多分、それが何か反映された手応えを1回目の子が得る機会がなければ、次はもう、ええかげんなことしか言わないですわ。だから、彼らにも責任を持たさなあかんし、やるんやったら何回か同じ子らに責任を持たすような仕掛けが要るでしょうね。前回ここまで言うて課題が分かったから、これについてもっと話し合ってくれとか、これはできるけど、これはでけへんぞみたいだね。まさにその辺のやり取りがこれから目指す生徒指導の方向性やと思います。

○知久部長 竹内先生、ありがとうございました。

次第のところを確認していただくと、3で「子どもの意見聴取の方法など」ということで、今日、資料を先生方に先にお配りして、ご覧いただいたのかと思います。

○竹内先生 はい、はい。見てます。

○知久部長 御覧いただいたのかなと思うんですが、後ほどこの点についてはまた詳しく御質問いただければなと思います。

○竹内先生 はい。

○知久部長 先ほど課長から基本計画の構成（案）について説明して、各先生から意見をいただいたところですが、ちょっと戻るんですけれども、構成（案）についての質問ですか、いかがですか。

○小泉部長 教育政策部長、小泉です。竹内先生のお話であったハードエビデンスとソフトエビデンスのところちょっと、すみません、いま一つ理解できなかったところがありまして、どういうものがハードエビデンスで、どういうものがソフトエビデンスか、具体例をいただけるとありがたいんですが。

○竹内先生 ハードエビデンスというのは、学校なり社会が元から持っている指標です。不登校の数、ガラスの割れた数、校内暴力の数とか、それがハード、もともと持っているものです。それに対してソフトエビデンスというのは、例えば尺度、自尊感情尺度の数値、どう考えたとかね。ちょっと雑駁に言うと、大人が自分で勝手につくった指標がソフトなエビデンス。ハードというのは、元からその状態が持っている数値。その持っている数値、ハードエビデンスというのが変わらないけないというのをしきりにウィーン大学のやつらに言われました。僕らが、この指標がこう伸びたと言うと、それは誰が考えたんやとなりましたね。

末富先生、そんな感じでいいですか。

○知久部長 いかがですか。

○末富先生 ソフトエビデンスについてはおっしゃるとおりで、数値だけでは追えないとか、逆に言うと、ある定立したやり方が学校にはあるので、例えばがんじがらめの校則で縛るとするのは、ソフトに見えてめちゃくちゃな、ソフトの中でも固いと思われているやり方なんですよね。ただ、それ以外のアプローチが実は多様にあるということがあまりにも現場の経験値として知られていないということも、課題ではある。

○竹内先生 そうですね。

○末富先生 ちょっと雑談になりがちなんですけど、月曜日に埼玉県戸田市のデジタル庁の子どものデータ連携という事業がありまして、そちらの有識者ミーティングがあったんです。戸田市でも、そうした現場の経験値や、あるいは校長先生たちがどうやって学校をマネジメントしているかという校長の育成のためのルーブリックなんかをソフトエビデンスを蓄積する形で、ただ何らかの形で、例えば校長自身の自己評価にしてそのスコアを見るとか、ソフトとハードをつなぐようなこともお考えなんです。戸田市と同様にDXをお進

めの世田谷区であれば、そうしたソフトエビデンスとハードエビデンスをつなぐようなアプローチというのがあるいは可能になってくるので、そのあたりはP D C Aに乗せていくということもあり得るかなと思います。

先ほどお求めになっていた世田谷区の教育振興基本計画の基本構成は、こんなものだろうと思います。あとは、細かく章の下、節の下にある各項目についてどういう立て方をするかですけれども、確実に学校づくりですとか居場所づくり、不登校の子どもたちのためのサポートの場も含めてといったものを入れ込んでいくことと同時に、そこに対して、竹内先生がおっしゃったように、ソフトとハード、両方の面でこうしたことを、例えば一番強いのは恐らくもう事業評価等の項目として立ててやる。ただ、それだったら、今の時点であまりにも自分たちを追い込み過ぎると思われるのであれば、国と同じように、想定される指標群のような形でのやり方というのも少しお考えになったらいいかなど。

文科省にも、指標を縛り過ぎないでほしいというのは今回強くお願いして、今の第3期教育振興基本計画のときに、何かそこに書かれている指標だから学長が変えられないとかというのばかなロジックがあって、第3期教育振興基本計画のときに適当だと思われていたけど、もっといい指標があり得るといったときには、計画ともっといい指標とどっちが大事なんだといったら、もっといい指標のほうがP D C Aとしては正しいはずなんですよね。

○竹内先生 そうだね。

○末富先生 プランにとらわれて、チェックとアクションの進化を阻むみたいなことにならないように、指標は逆に今回固め過ぎないほうがいいんじゃないですかというのを申し上げたので、例えば世田谷区でも、そうした立てつけでソフトとハードを組み合わせられるようなことを、各章の下にある節や項で意識されるといいのかなと思いました。

○知久部長 ありがとうございます。

今までの議論をお聞きいただいて、何かございますか。

今後、行動計画のほうに来年度具体的な事業を検討し、書き込んでいくわけなんですけれども、今いただいたような、やはり評価して、どこまで到達したかというのを確認していく必要がございますので、今おっしゃられたような指標をどうするかというのが大きな課題になってくると思います。またその際にお知恵をいただく機会等を設けられればなど思っています。

では、構成についてはここまでとさせていただきます、次第の3の子どもの意見聴取方法

などについてに移らせていただきたいと思います。

○井上課長 それでは、再度、私、井上から御説明させていただきます。資料を共有させていただきます。それでは、3といたしまして、子どもの意見聴取方法などについてというところで説明させていただきます。

資料にありますとおり、計画策定までに、今のところでございますけれども、大きく4回程度の意見聴取を考えてございまして、図の矢印のとおり、令和4年9月から、4回目として令和5年9月にかけて実施してまいりたい、このように想定してございます。

記載の日付を見ていただくと分かりますけれども、第1回と第2回の意見聴取につきましては実施を終えてございます。後ほど資料で概要を説明させていただきます。また、「第3回 令和5年5月ごろ」とありますけれども、時期はこの頃を考えてございしますが、対象年齢ですとか実施手法、また、対象者の選定方法など、まだまだ固まっておらず、この辺を課題と認識してございます。後ほど両先生からまた御意見やアドバイスをいただければと考えてございます。また、第4回につきましては令和5年9月に、こちらはパブリックコメントという形で実施しまして、その後、世田谷区の教育委員会、世田谷区議会での議論を踏まえて、策定という大きなスケジュール感を持ってございます。

続いて、6ページに行ってください、まず、既に9月7日から21日の2週間にかけて実施しましたアンケートについて御説明させていただきます。

概要に記載のとおり、小学校3校、中学校2校で1学年1クラス、小中合わせまして24クラスにアンケートを実施してございます。

アンケート内容といたしましては、資料記載のとおりでございますけれども、学校生活や学習内容、教育環境面に関する視点としまして、質問1でございます。「みんなが楽しいと思う学校は、どんな学校ですか。また、どんな学校にしたいですか」というものです。また、質問2でございますけれども、こちらはウェルビーイングに関する視点としまして「みんなが幸せになるためには、なにが必要だと思いますか」というものでございます。最後、質問3でございますが、目標設定や挑む・挑戦する意欲に関する視点としまして「大人になったら、どんなことをしたいですか、してみたいですか」、こちらの3点を記述式で回答してもらいました。

ページを進めまして、7ページでございますけれども、これはアンケート結果としまして、資料記載のとおり、回答者数が588名でございます。回答率は77%でございます。また、小学校1年生から中学校3年生まで、それぞれの回答者数は右側の棒グラフのとおり

でございます。

8 ページに進んでいただきまして、質問 1 の結果をテキストマイニングの手法を用いまして、出現頻度が高いほど字体が大きく太くなるということで、また、名詞が青色、動詞は赤色、形容詞は緑色で表記してございます。吹き出しが 4 つほど出てございますけれども、どの単語がどの単語と結びつきが多いのかというのを例として示してございます。一番真ん中にある「楽しい」は、資料の右斜め上のほうですけれども、「仲良く楽しい」「授業が楽しい」、またその下、「優しい」の吹き出しでございますけれども、「みんなが優しい」「先生が優しい」というような回答になってございました。

続いて、9 ページに移りますと、ただいまの結果を参考としまして、名詞、動詞、形容詞別に出現頻度の回数を表した資料になってございます。

続いて、10 ページに行きます。こちらは質問 2 「みんなが幸せになるためには、なにが必要だと思いますか」の結果につきまして、先ほど説明した質問の 1 と同じテキストマイニングの手法で記載したものでございます。

続いて 11 ページ、こちらもただいま御覧いただきました 10 ページの出現頻度回数を、名詞、動詞、形容詞ごとに記載した資料になってございます。

続いて 12 ページです。こちらは、ただいま御紹介した質問 2 を、今度は小学生のみということで作った資料でございます。次の 13 ページは中学生だけということになってございます。どちらも真ん中に「思いやり」という言葉が位置してございまして、また共通して「優しさ」ですとか「ルール」「友達」という言葉が出現頻度回数の上位に来てございます。

続いて 14 ページに行っていただきまして、こちらは質問 3 「大人になったら、どんなことをしたいですか、してみたいですか」についての小学生の回答をテキストマイニングの手法で表してございます。資料を御覧のとおり、真ん中に大きく「サッカー選手」、また「YouTuber」「パティシエ」など、小学生の場合は具体的な職業の記載が数多く見受けられました。

また、15 ページに行っていただきまして、こちらはただいまの質問 3 の中学生の回答をまとめたものでございます。小学生とちょっと異なりまして、真ん中に「仕事」、また、「未定」「稼ぐ」など具体的な職業名以外の記載が数多く見られました。

これらのいただいた意見につきましては、子どもたちがこういうふう考えているんだという一つの指標といえますか、そういったものでございますので、今後策定します教育

目標、基本方針の骨子案策定に際しての参考にしていきたいと考えてございます。

続きまして、去る10月23日に世田谷区の施設でございます池ノ上青少年交流センターで実施しましたティーンエイジ会議の実施概要を簡単に御報告させていただきます。

参加者ですが、当日は、急遽欠席したお子さんもいらっしゃる関係で、9歳から17歳の12名ということで、3グループに分けてましてワークショップを行いました。また、1日限りのティーンエイジ会議だったんですが、当日終了後、1月中旬にフォローアップの会議をやろうということでその場で決まったようで、今後実施する予定と伺ってございます。

ふだんの生活や学校などで、「なんでやねん！」と思うことをカードに書き出して、グループごとに発表を行い、その発表を聞いた区長や教育長などから講評があったということでございます。少し見にくいかもしれませんが、ただいま御覧いただいている資料の右側は、発表者の発言をその場でファシリテート役の補助する方が、どんどん書き込んでいったものとなっております。

続いて、18ページは写真なんですけれども、小学生のグループの「なんでやねん！カード」をまとめたものがございます。文字としてはちょっと御覧いただけない部分もあると思いますが、家族や家庭内に関することが非常に多い印象を受けてございます。

続いて19ページの資料です。こちらは高校生グループの「なんでやねん！カード」をまとめたものなんですけれども、ほとんどの意見が学校に関する意見でございました。

最後の20ページは中学生グループの「なんでやねん！カード」をまとめたもので、こちらも学校に関する意見が多い印象を受けました。

説明については、ちょっと駆け足になりましたけれども、以上となります。よろしくお願いたします。

○知久部長 この間取り組んできた内容の説明と、世田谷区の教育振興基本計画策定に向けた今後の子どもの意見聴取の考え方を説明させていただきました。両先生から今の説明に対する感想、今後の取組についてお話を聞きたいと思います。まだ我々もちょっと手探りの状況でやっております、狙いが絞り切れていない面もあると思いますので、その辺も含めて率直な意見をいただければと思います。竹内先生から先に、よろしいですか。

○竹内先生 一生懸命子どもたちにやらせていると感じます。今は、子どもの意見聴取について意見を言うたらいいの？

○知久部長 はい、そうですね。来年に向けての私どもの取組、方向性だとか、手法ですとか、そういったものも含めていただければと。

○竹内先生 いろんなことを、いろんな子に、いろんなタイミングで聞くとぐちゃぐちゃになるので、できたら同じ子らに何度もやり取りするのがいいかなと思います。例えば、1月にもう1回再チャレンジは、何をするの？

○知久部長 今回このティーンエイジ会議については、福祉部門との連携で実施をしています。今回実施したものについては意見を聞くという場だったので、それについてもう一度振り返って、どういうふうに今後対応していくのかについてを1月にもう一度やろうという話になっています。

○竹内先生 それは、誰が、どういう目的で、何をやるの？それはこの基本計画には反映させるの？

○知久部長 そうですね。どう反映させていくかも含めて、これからちょっと検討なんですけど。もともとのこのティーンエイジ会議の実施が、こども基本法ができて、子どもの権利について、より子どもたちに考えさせようということで子ども系の部署でこの案が出てきて、当然学校のことも出るだろうからということで我々ものっかって、今回参加させていただいたんです。ですので、基本的に、狙いとしてはこども基本法に基づいて子どもたちに考えさせる場というのが、そもそもの場である。ただ、聞きっ放しが駄目なことなので、1月にもう1回振り返りましょうという、今そんな段取りになっています。

○竹内先生 だから、やるんやったら、その子らのこの意見をこれにフィードバックさせるようなものにしなあかんし、福祉部がやるから勝手に、言いつ放しはあかんからやらせればというのにするし、その辺を決めていかないと、今回のと、次の子らもまた集めるでしょう。そいつらにまた言わせて、そいつらもまた言うて、何やぐちゃぐちゃになるような気がするから、何か一貫したものを考えはったらいいなと思います。

その意味で提案やけれども、1回目、2回目にすごく方向性が分かって、大体その方向性を基にこれをつくったので、もうちょっと絞って、これから無理なのかどうか分からへんけど、4回目、5回目、同じ子らを呼んで、何かもっと突っ込んで聞いてったほうがええんちゃうかな。何か、いろんな子にちょこちょこ聞いて、どこに誰の意見がどう入るかというのが、おいしいところだけ、何か使えそうなところだけ、ぴゅっぴゅっつまむような感じに思われたら、そんなことないと思うんだけどね、何かありがちな、子どもに聞いたふり会議みたいな感じになるとかわいそうなので、何かそのあたりをね。ごめんね。大阪弁でちょっときつく聞こえるかもしれんけど、悪意はない。やっていることはすごくいいと思うねんけど、福祉部の人も入って、いいと思うんだけど、その辺をちょっと

考えないと、ぐちゃぐちゃになるんちゃうかな。聞き過ぎて、わけ分からん、そういうの、ようあるねん。

○知久部長 ありがとうございます。

末富先生、いかがでしょうか。

○末富先生 まず、私も最近よく似たことを聞かれて、似たことしか返さないんですが、みんなのことを先に聞くのはやめましょうと。自分が何を学校でいいと感じていて、何があかんねんというところから組み立てないと、私が中学生だったら、みんなにとって楽しい学校を考えろと言われた時点で、ああ、またこれ系かたみたいな感じで……。

○竹内先生 そうそう。そういうことやな。また始まったでと。

○末富先生 やる気なしみたいな、何かで見られていたら嫌だから、取りあえずいい子っぽい答えにしておこうになるので、まず完全無記名であることを何回も言う。オンラインの画面でも出るし、先生も口頭で言うみたいなどころから始めて、今のあなたにとって、学校の楽しい要素と楽しくない要素は何というのを評価させるほうが、本当のことが出てきます。本当のことを聞かずに、今、計画をつくろうとしているように見えるので、だから、本体にとって一番痛い質問を避けて……。

○竹内先生 そうそう。言わせないようにしている。

○末富先生 何とかならんかなみたいなふうに見えちゃうんですよ、恐らく子どもたちにも。なので、そういうふうには、まず自分から見ると、みんなのことはいいです。権利と自由は、先に自分があるものです。自分の権利と自由を大切にすることから、相手の権利と自由は大切にできるんです。逆に言うと、自分への自覚なしに思いやりだけ言われたら、大して相手への思いも持ちません。自分への思いもそうだし、恐らく多くの日本人がそうだと私は見ているんですが。逆に言うと、子どもの権利やこども基本法みたいなもの、あと生徒指導提要もそうですよね。こういうものに権利が位置づくというのは、自分自身への意識や思いをもっと深く明確にしていく。

主体的で対話的で深いというじゃないですか。主体的で対話的で深い学びって、誰よりも自分との対話でしか成り立たないんですよ。相手と幾らしゃべっても、自分に落とさなければ、特に深いとかは出てこないです。そういう意味では、まず自分が、何となく過ごしていて、何となく楽しいとか、日々いろいろ嫌だとか思っているかもしれないけれども、それをきちんとまとめて向き合ってみたら、これが楽しくて、これが楽しくないとか、先生のこういう態度はとてつもない嫌いだとか、あるいは、この先生はすごく信頼できるだ

とか、そういう自分自身の意識を出させる。

そこから、子ども自身ももう学校づくりのパートナーですから、杉並では、あなたが校長先生だったらどんな学校をつくりますかって聞いている。

○竹内先生 なるほどね。

○末富先生 みんなではない。あなたである。まず自分にとって、今の学校の状況を整理させる。じゃ、あなたが校長先生だったらどうしますかということを知ると、割と具体的な案が出てくるわけです。

そこから、杉並が次に何をしようとしているかというところ、そこに子どもとPTA、子ども多め、大人少なめのグループをつくって、じゃ、次に何かからよくしていく？みたいな感じの話合いが、うちの子の小学校だと、12月にやるんです。なぜなら、子どもが主体の学校づくりだからです。

ただ、それもさっき竹内先生がおっしゃったように、丸投げじゃないんですよ。うちの子の小学校の場合には特に行事のうち、12月中までに先生方でどの行事から、ウィズコロナが当たり前になり過ぎたけど、子どもたちが、どうやったら今みたいに大人が気を使いまくって何かやっているみたいなのではない、ただ、感染症も怖いよねという親や子どももいる中で、あと近所の高齢者施設からおじいちゃん、おばあちゃんももともと来ていたような中で、じゃ、どうしていこうかという行事を絞って考えていくみたいに、ある程度、学校へ落とし込んでいくとか、教育ビジョンから学校への流れの中に子どもたちが主体として位置づく。まず、全て自分事なんです。みんな事ではない、自分事なんですというようなやり方でやる。

意見を出させるときには、子どものほうが多くなければならない。大人も本当のことを言えるファシリテーションができる人がある程度いないと成り立たないという意味で言うと、割とその大人のほうの育成も大事かなと。

うちの子の小学校は、私も学校運営協議会委員なので、皆さん方、もともと遠慮なくおっしゃるんですけど、そういった文化がないところだと、逆にそういう文化がある学校に行くと、大人に学んでもらって、持ち帰ってもらいたいことをしないと、多分うまくいかないんですよ。

例えば、今それを言って、恐らくあの学校ならできたらと皆さん方がお思いの学校があると思うんですが、そうしたところでパイロットケースを組み立てて、次の教育振興基本計画までに全部何かやるというよりは、試行的にやってみて、例えばこうしたタイプ

の活動を第4期計画につくる。基本計画なので、例えば子どもとつくる学校みたいな、あるいは子どもを学校づくりのパートナーにでもいいんですけど、というようなやり方で意見を聞いていく。そうすると、ウェルビーイングの視点ももっと具体的になりますし、個別日常の学校の場面、場面が全然変わってくるはずなんですよね。というようなことを今、お話を聞いていて思いました。

まず、自分から。みんなを先に立てない。思いやりを出すなと私は言っています。思いやりを使わない。みんなすぐに、優しさ、思いやりと言うでしょう。大学生でも言っているんです。優しさ、思いやりを使わずに、あなたが思ういい学校を表現しなさいと。優しさとか思いやりというのは、やばいとかと同じで、思考停止ワードなんですよね。そこに入っているいろんな要素を包む、何て言うか、隠しちゃみたいなの。それさえ言っておけば何とかなるだろうみたいな感じの言葉になっちゃっているのというぐらい、実は、自分から始めると、優しさとか思いやりとかも出てこないと思います。ここがいい、ここが気に食わんというふうになれば、逆にしめたものなんですけどということですね。

そういう設計の仕方を少し、急に何でもやろうとすると絶対無理が生じるので、まずパイロット的な学校から、アンケートだとか、参画の仕方を組み立ててみて、それを反映できる意見を反映しつつ、そうした試みを次の教育振興基本計画中に当たり前にしていくというような考え方だと、無理なく進むのと、ああ、なるほどと。何か大人って、ここまで言っちゃっていいんですねみたいな感じのことも分かると思います。

○竹内先生 言いやすくなったんで、僕も言いますわ。その優しい学校、思いやりの学校、あそこに書いてあるのは、もうほんま子どもら無難に、この辺言うといたら、多分こいつらちょろいわと思われて（笑）、実際そうやろ。

○竹内先生 思いやりの学校なんか、そんなん当たり前の話で、思いやりのない学校を目指すやつなんか、おらへんねん。じゃ、思いやりのある学校をつくるにはどうしたらいいねんって、その先のことが大事で、だから、その思いやりの学校と言うたやつを逃がさないで、じゃあどうすんねんというふうにやっていかんとあかんねん。それには、でも、そんな強い言い方をせずに、末富先生がおっしゃったポイントは、ファシリテーターをつくらなあかん。例えば、その回は誰が司会をやったんですか、子どもの意見を誰が回したんですか。責めてるんじゃないですよ。ちょっと質問。

○知久部長 今回の会議ですか。

○竹内先生 うん。

○知久部長 まちの中で、児童館に来られていて児童との関わりを非常に持っていらっしゃるような方々、こういったファシリテートの経験もあるとは聞いていたんですけれども。

○末富先生 実際、区の計画だったり、今の区とか子ども若者のことをどうやってよくしたいかみたいなどころなので、むしろまとまらないほうが当たり前ぐらいのことじゃないかなと思ったので、多分、ワークショップ型のものをもう少し学校ベースでやっていただけるようにしていくほうが、恐らく学校も学ぶところが大きいんじゃないかと思います。

○竹内先生 最終的にはそのほうがええわな。そのとおりです。

○末富先生 特に世田谷に御異動されている先生方は、ある程度素質がおありの方ですので、私も最近、岩波に提出した校則の本で、校則の見直しをやった学校の管理職の方のヒアリングをしましたが、やっぱりファシリテーターから教員が学ぶことで対話のありようが変わったという。ただ、ファシリテーターにもフォローアップしてもらう必要があるというのをおっしゃっておられたので、世田谷の場合には、そうしたファシリテーション能力がおありの方も、山口さんの団体もそうですけれども、あと、私も松田妙子さんなんかとちょいちょいお会いしたり、非常にもう人材はいっぱいいる。カタリバさんもいるという状態なので、逆に言うと、そうした地域で根差して活動してくださっている団体さんと学校を結びつけて、生徒と一緒に学校や地域のことを考えようというほうが、それ自体がもう、先生も生徒も成長の場になっていく。

○竹内先生 学びになるからね。

○末富先生 そうなんです。なので、そこをやってほしいなど。

残念ながら、杉並でもまだそこまで行けていなくて、たまたまPTAとか学校運営協議会の大人がばあっと言えるとか、ファシリ能力があるみたいなどころに頼ってしまっているんですが、世田谷の場合には十分支えてくださる団体さんがいらっしゃる中で、学校もまず子どもに自分のことを率直な言葉で言わせる。もちろん空気を読みますよ。空気を読むんだけど、前よりは本当のことを言えたかなみたいな。

○竹内先生 うん、なるわね。

○末富先生 というところにステップを進めていくやり方を来年度にかけちょっと構想されて、1月のときにも、どうやったら子どもや若者が意見を出しやすくなりますかというのもアイデア募集して、例えば学校とかでやるときに、やっぱり意見を言いづらいですかとか、例えば学校の話合いとかで、こういうのはすごい意見が言いやすいとかはあります

かというふうに聞いていくと、割と学校でもやりやすい方法というのは子ども目線から見
つかりやすいかなと思います。せっかくやっていくので、閉ざされたイベントというよりは、
学校とも開発型のイベントにしていくほうが。

○竹内先生 大賛成。

○末富先生 子どもも、何か今までとノリが違うみたいな、先生方も、何かノリが違うっ
て思ってもらうほうが、やっぱり次の教育振興基本計画ができていくときにはいいんじや
ないかなと思います。

○竹内先生 東京のように、関西にはろくなファシリテーターがおれへんねん。だからも
う関西は、僕が学生を教えて、学生を鍛えていて、多分うちの学生は、関西ではトップク
ラスのファシリテーター力を持つとんねん。関西ではね。関東には全然かなわへんけど
な。僕はその関東のそういうすばらしいファシリテーターの人を知らなかったから。

僕はウィーン大学で向こうの人らにずっと学んできたんよ。やつらはもうすごいねん。
しかも、子どもにお菓子食いながら、やらしよんねん。「こんなん日本でできへん」「何
で？お菓子食うたら子どもたちがリラックスするからいいじゃないの」「いや。うちの中
学校はお菓子を食えない文化で」「何それ」とえらい怒られてんけどね。

その辺の、子どもたちにファシリテートするというのと意見を出さずというのが、全く
日本の中にまだ文化としてないねん。特に関西は、おらあっていう生徒指導が仕切っどる
からね。だから、うちは学生たちにやらしてて、僕はそんなんがおらへんと思うから、実
はもし呼ばれたら夜行バスでうちの学生を連れていこうかなと思って。でもまあ、いてる
んやったら、そういう人らにやってもろたらいいけども。

そこで一番ポイントは、司会をする教員というのは、とにかく、「おまえは分かってる
やろな。いい学校というのはどういう学校か書いとけ」「うん？ 楽しい学校、いいね、
それ」と言うて、こっちが思てることを書かす、出させるのがいい指導者というのが、括
弧つきのがあんねん、関西にはね。

だから、そうじゃなくて、本当に子どもたちが言うていいんだよというためのアイスブ
レイクであるとか。アイスブレイクはめっちゃめっちゃ大事ですわ。アイスブレイクとか、ど
ういう机の配置にするとか、アイスブレイクをするときに大人がどういう態度を取るか
とかは物すごい重要で、その辺からやっぱり考えていかなあかんし、上質なファシリテ
ーターを先生方に見せて、僕は末富先生がおっしゃるように、最終的には先生がファシリテ
ーターになるための研修をやっていくと、学校がそれこそ変わっていくと思う。先生方は

支援者になる。ファシリテーターというのは支援の究極の形やと僕は思うねん。会議の中でね、究極ではないけどね。

だから、ファシリテーターという言葉も、僕は熟した日本語やと思ってて、次から会議支援者ぐらいにしたろかなと思ってんねん。そういう意味でしょう、末富さん。

○末富先生 はい。おっしゃるとおりで、特に世田谷の先生方は、学べば多分のみ込みが早くて、あっ、こうやればいいんですねみたいな勘どころのいい方が多いと思うんです。なので、やってみれば進化は早い。あと、その計画本体に対しても、まず児童生徒自身が、いいところもあれば、もうちょっとましにしろと思っているところもある、本音を引き出せるのと、それイコール先生の駄目出しではない。学校のことを考えればいいので、先生に駄目出しさせるとちょっと、大学の教員評価でも時々へこむときがあるので、ウェルビーイングにはあんまりよろしくないです。

なので、学校全体で、これをやる、あれをやる、まずそれを考える。あなた自身がどう思っているのか、校長先生になるとしたらどう変えるかというふうなことが仕切れると、どの学校でも自立自走して、児童生徒が自己決定して、先生たちがそれを助ける形で、いい学校ができる。あるいは、問題が起きたときに、どうしたらいいんだろうというのが割と早く自分たちの答えが出せるというふうになっていくと思うので。

○竹内先生 僕も全く賛成。だから、4回目で上質のファシリテーションの中で彼らが自分らの思いを、優しいとかそういうことでなくてね。本当に自分の言葉で学校をどう変えていったらええかとか、そんな話を出して、それをしっかり学校が受け止めて、教育委員会が受け止めて、大人はこう考えるんだけど、さらにどうしていったらいいかという、その次、5回目でそれを聞く。そのやり取りをするような、そうしたら、子どもらも、ええかげんなことを言われんようになってくるから。「大人もちゃんと考えてんで。じゃあ、あんたらも、これどう思う？」って、そこで論点整理することがポイント。もしかしたら、それが髪型になるかも、靴下になるかも分かれへんけどね。トイレになるかも分かれへんし、分かれへんけど、何か彼らが象徴的な意見を言うてくると思うから、そこについて焦点化して話をしていくと、すごくよくなっていくんちゃうかなと思います。

そんな形で、いいですか、皆さん。

○知久部長 ありがとうございます。大変貴重な御意見をいただいて。

○竹内先生 でも、あんまり言うと、皆さんも会議がやりにくなるわな。申し訳ない。

○知久部長 まさにこのアドバイザー会議で聞いたかった内容だと、みんな考えている

んだと思います。

○竹内先生　そうですか、あんまり言うよ。僕も、10年前、そっちに座ってたから、あんまり言うなよ、こいつって、大学の先生に思うてたから。（笑）ごめん、ごめん。

○知久部長　我々も軌道修正する時間もございますし、貴重な御意見をいただきました。

○竹内先生　でも、末富さんが言うてはることは、難しいことやけど、実は簡単なことやねん。そうしたほうが絶対いいものできると思うので、頑張りましょう。

○知久部長　いかがですか、今お聞きいただいて。

ちょっと1点だけお聞きしてよろしいですか。先ほど末富先生から計画策定の基本的な考えの構成のところ、我々のPDCAサイクルの点で、今までの流れの中だと思うんです。子どもの意見を大切にすること、このPDCAサイクルの中で入れたほうがいいというような御意見が出ていたんですが、地方教育行政に関する法律で、例の点検評価というものをもう何年か続けてつくってきているわけなんですけれども、その中に今先生おっしゃられた子どもの意見を点検評価の中に反映させていくというか、ちょっとその辺の意識が我々はなかったんですが、実際にやっているような自治体があるのかとか、どんな手法が考えられるのか、そんな点をお聞きできればと思ったんですけれども、いかがですか。

○末富先生　形式的にはそれぞれの区でテストと一緒に、別のタイミングかで、学校評価だったり生活状況のアンケートを取っておられるじゃないですか。あれを使って、したことにはいらっしやるんですが、それよりは、学校評価自体も、実は、あんなの平成の遺物だと私は思っているの。

○竹内先生　そのとおり、そのとおり。

○末富先生　いや、それも文科官僚には、そんなことをいつまでさせているの、時間と税金の無駄でしょうということを申し上げているんですが。正直、何十年と見慣れたような評価項目で、しかも、それが学校運営の改善にダイレクトに結びつくかという、ほとんどそうではない。例えば「あなたはこの学校が好きですか」と言われたら、どんな学校でも8割超えるんですよ。逆に8割切っていればやばいぐらいのときにしか使えないので、何というか、何がしたいんだろうな、このアンケートみたいな状態なんですよ。

逆に言うと、学校評価の改善自体、そのアンケートの改善自体が、実は子どもの意見から組み立てることだってできるんです。それは竹内先生も多分なさっていると思いますけれども、先にインタビューして、インタビューからどういう形でアンケートを組み立てれ

ばいいかみたいなことというのは、比較的当たり前の手法なんですよね。

というようなことも含めて、実は今ある全てに子どもの声が反映されない仕組みになっています。やっているつもりのところでも、大人が決めて、文科省様の出したひな形どおりに何かつくったり、その後、区で、謎の何か込み入ったことをおっしゃられていて、これも専門家が見るとイライラして仕方がないので、杉並区にもやめてください、こんな調査って言っているんです。私だけじゃないですよ。学校運営協議会の意見として、この項目は要らないというものを毎年出しているんですが、何も変わらないんです。そうやって、PDCAが回っていることになっている杉並区もすごいなとずっと思っていましたけど、どうも今年の教育ビジョン以来、何か変えようとしているんだなというのがやっと見えてきたという感じなんですよね。

実際の学校の運営そのものを子どもと一緒にやっというところに動き始めているというのを、やっと手応えとして分かっているんで、その手応えの部分をどうするかと、もう一つは、今まで聞いてきたような子どもへのアンケートの部分をどうするか。保護者もそうですけれども。ということがあると、PDCAの回し方が、今までやってきたものだって相当レベルアップできるし、子ども自身の変化だったり、あるいは学校が子どもや先生にとってウェルビーイングの場となっているのかということも含めて、見えやすくなるだろうと思います。

できることは幾らでもあります。ただ、逆に、やらなさ過ぎてきたので、子どもの意見を反映させるということは何から手をつけるかということを整理するのが、恐らく教育振興基本計画の役割だろうと思います。

○知久部長 忌憚のない意見をありがとうございます。また一から組み立て直していきたいと思います。ほかにございますか。

○渡部教育長 最後に、すみません。ありがとうございます。学校評価に関しては、世田谷も杉並さんと全く同じです。今とっても苦しんでいるところです。本当にあれを変えなければいけないという問題意識は持ちながらも、その方向性がはっきりと私たちの中ではしていなかったんで、今回のこれを機に何か方向性が分かる気がしますので、それに関してもちょっと着手していこうかなと思っているところです。

それから、こうやってお2人のアドバイザーの方にお話を伺うことができ、本当に良かったです。もしかしたら、そのまま私たちはあの思考停止ワードを出してしまったり、それから、子どもに聞いたふり会議をして、そのまま……。

○竹内先生 ごめん、ごめん。ちょっと言い過ぎた。(笑)

○渡部教育長 なるってしまうところでした。私たちはやっぱりかなり考えをがらっと変える必要があるということを知りました。お2人の先生から、私たち自身が分かったふりをしてたんだなということに気づかされたので、これからまた少し新しく組み立てていく必要を感じています。

それから、先ほどのティーンエイジ会議なんですが、実は末富先生も御存じの松田妙子さんをお願いして、やったものなんです。だから、この会議自体は、もう少し狙いとかをはっきりとこっちのほうでもさせておいて、これにつなげていくという形をしっかりとお伝えしていけば、そうしたらいいものになったと思うんです。

○末富先生 そうですね。松田さんなら、学校でいずれやりたいから、生徒がしゃべりやすいとか、先生も同じ目線でしゃべれるようなやり方でみたいな、例えば指導主事の人とかにも一緒に入ってもらって、先生をどうやってその場でなじませるかみたいの実験を全然やっても、松田さんなら楽しんでやってくださると思いますので。

○渡部教育長 はい。ありがとうございます。こちらのちゃんと伝えていなかったところもありましたので、これから先はもう少しその狙いとか、それからどのようなものかというところもはっきりさせながら進めていこうと思っています。

○竹内先生 ちょっとええかな。ちょっと1個だけ。

聞いたふりとか思考停止とか言うてもうたけど、でも、聞いたふりするだけでもすごい前進やね。それが、それすら今までやったことないねん。やってきてへんねん。それすらやらずに、ずうっと来たわけよ。戦後からずうっとね。もっと言うたら、戦前から、教育勅語の時代からずうっと、こっちのことをたんたんと聞いて、子どもに意見を言わずときとか朝礼のときとかに、生徒指導のやつが書いたやつを生徒に読ましとったんや。それで生徒の声というふうにならわしとったんよ、昔はね。だから、それに比べたら物すごい前進。それが一つ。

もう一つは、そういうファシリテーションを調べるために、僕、小松市と、今からもう5年ぐらい前から、小松の学校教員をファシリテーターにしようと思って、ずうっとやってきたけど、ほんま難しい。特に北陸の田舎やしね。ほんまに難しい。だから、末富先生は優しいから世田谷にはいい先生がいっぱいおると言いはるけど、いい先生ほど難しいねん。括弧つきのいい先生やけどね。上から教えなあかんというのがなかなか消えへんからね。だから非常に難しい。末富先生は優しいから世田谷のことを褒めはるねんけど、僕は

ちょっと、非常に時間がかかって難しいとは思いますが、でも、いい先生は絶対おるから、特に若い先生。やっぱり諦めずにやっていったらいいんじゃないかなと思いました。

ごめんなさいね、思考停止とか言うてもうて。

○渡部教育長 いえいえ。

○竹内先生 やっただけ、それはすごい前進ですよ。

○渡部教育長 はい、ありがとうございます。今の言葉に勇気をいただいたので、世田谷の教員がどこまで行けるか、ちょっとやってみようかなと思っています。

○末富先生 私は世田谷の学校も知っているのですが、世田谷の先生方は、1回やってみて分かれば、やっちゃうと思いますね。

○渡部教育長 ありがとうございます。

○末富先生 私も、今年現役合格したゼミ生が千歳台の小学校でずっとボランティアをさせていただいている、いろいろ話を聞いたり実習を見に行くと、本当に伸びやかに若い世代の先生方に活躍させていただいているので、そういう意味では、なんかできるかなって思っていますので、期待しています。

○渡部教育長 ありがとうございます。楽しみにになりましたので、ぜひ取り組んでいきたいと思っています。

○知久部長 最後に温かいお言葉をありがとうございました。背中を押していただいて、これから頑張っていきたいと思います。

両先生にはありがとうございました。では、ここで閉じさせていただきますけれども、ちょっと最後に事務局のほうにお返しします。

○井上課長 末富先生、竹内先生、お忙しい中、第1回に続きまして、本日第2回、本当にありがとうございました。このアドバイザリー会議での両先生の御意見、御指摘を踏まえまして、世田谷区教育振興基本計画の骨子案策定を進めてまいりたいと考えてございます。改めまして、本当にありがとうございました。

以上をもちまして、第2回のアドバイザリー会議を終了とさせていただきます。